

死者に手向ける一本の香から

神戸の悲しいあの朝が明けた

“お仏壇の浜屋”のテレビコマーシャルで知られる浜屋株式会社（浜田博邦社長、兵庫県姫路市南畝町二ノ三）は、兵庫、大阪両府県に三十一のチェーン店を擁する関西の仏壇、仏具の最大手であるが、このたびの兵庫県南部地震で神戸店、新長田店、西宮店、伊丹店、尼崎店、明石店、池田店、江坂店の八店舗は建物自体の倒壊は免れたものの、店内で仏壇の損壊がひどく、陳列商品は壊滅的な打撃を受けた。それにもかかわらず、この八店舗は、被災地の仏壇、仏具店としていち早く立ち上がり、一月二十七日から完全営業体制に戻すという離れ技を成し遂げた。現在、震災の遺族に仏壇二千五百基の無料提供も実施中である。地震発生以来、浜田社長は神戸市中央区元町の神戸店に復旧対策本部を置き、ここから連日、全店に向けて陣頭指揮を執った。そこで、今月三日に神戸店の浜田社長を訪ね、被災地の仏壇、仏具店が体験した現場からの生の声を聞いた。以下は浜田社長から本紙に送られたメッセージである。

「被災者同士だ」

“お仏壇の浜屋”

供養の道具求める客

内部壊滅の八店舗訪ね「お骨入れがほしい」

「十八日間」語る浜田博邦社長

浜屋の対応がモーレツに早かったのは、私の住まいが灘区にあって、始めから大震災の心臓部にいたからです。私自身も被災者の一人でありますので、被災者の方々のことは肌で感じています。

地震発生以来、神戸から離れていませんので、私が体験した今日までの十八日間のことをお話することで、わが国が体験した初めての都市型直下地震の状況が明らかになると思います。

地震発生から順を追って説明いたします。

まず、朝一番、とるものもとらず神戸店に駆けつけました。一階のシャッターが開かなかったので三階の窓から店内に入りました。店内の仏壇は、無惨にも重なり合って倒壊していました。この光景を私は正視することができませんでした。商品はすべて、完全に全滅状態でした。

火災の被害が大きかった長田町にある新長田店は、十七日夜のラジオで、すぐ近くの第一勧業銀行と神戸デパートまで火の手が上がっているのを聞いて、諦めてラジオのスイッチを切りました。ご承知のとおり、それから火は二十四時間燃え続けました。しかし長田店の向かいの道路で火が止まり、奇跡的に類焼は免れました。

この二店のほか、伊丹店と西宮店を含めた四店舗は自社物件です。もしこの四店舗の建物が倒壊していたら、浜屋創立以来の最大の経営危機に直面したでしょう。

不思議なことは、まだありました。神戸店は、最初から電気も水も止まらなかったのです。元町のセンター街の中で、命の綱の電気と水が通じていたのは、浜屋を含めて十軒もありません。なぜだか本当のことは、いまだに分かりません。

電気と水が通じたことで、どれほど役に立ち、勇気づけられたかは、追って説明いたします。

神戸店と新長田店は、地震当日の十七日も店の入り口だけは開けていたのですが、実はこの日からお客さんはあったのです。

午前中の最初のお客さんは家が停電しているからと言って、ロウソクを求めに来られました。しばらくして、身内が亡くなったので線香とロウソクが欲しいというお客さんが数人ありました。

午後から来られた男の人のことは、今も私の脳裏に焼き付いて離れません。その人は「私の親父が亡くなった。遺体は毛布にくるまれて、避難所で私の横に置かれている。線香一つだけでも立てたいのですが——」と言われるので、私は線香とロウソクに京机など簡単な仏具一式を揃えて、無料でお渡ししました。その四日後、その人は「おかげさまで親父は無事お骨になりました。いずれ正式に仏壇をお世話していただく日がくるでしょう」と言って、無料提供した仏具類を返しに来られました。

この話に象徴されるように十七日と十八日のお客さんの求められたものは線香とロウソクでありました。

近くの神戸のYMCAの会館にも遺体が続々と運び込まれていました。ここには、線香が置いていないので、線香とロウソクを提供させていただきました。寺院の本堂でも遺体の安置所になっている所もあったので、線香とロウソクを、できる限り持参させていただきました。

それが十九日になると、お骨入れを求めるお客さんが増えてきました。この日を境にして遺体が火葬できるようになってきたからでしょう。

お骨入れは、避難所にいる遺族の身内の人の枕元に置かれていました。二十日、二十一日と避難所にお伺いして気づいたのは、このお骨入れの上を平気で跨ぐ人がいるという悲しい現実でありました。

「被災された人で、不幸にも亡くなられた人のある家庭に特別に用意した仏壇を無料提供すること」を、私が決めた最大の理由は、この現実を身をもって体験したことに帰するからです。

「社員もよくやった」浜田社長【写真は省略】

お茶のサービスでにぎわう浜屋神戸店の店頭【写真は省略】

上置き仏壇無料提供

売名でなく真心の奉仕

今度の大震災で、十万户以上の焼失、損壊家屋があり、死者五千人を超え、かろうじて生き延びた人々は絶望と疲労を乗り越え、再び立ち上がろうとしています。

仏様のことに携わっている業界の者にとって、大震災で亡くなられた方に何ができるか考えた行為が、特別に準備した上置き仏壇の無料提供をさせていただくことだったのです。

しかし仏壇の無料提供という話題だけが、二十六日の毎日新聞に報道されたことで独り歩きしてしまいました。このことは浜屋の名前を表に出さずに、ひそかに市に協力する形を取りたかったのです。

そのため市の民生局に陳情に行きました。市は「あなたのご好意は有り難く承るが、宗教上のことは行政で扱えない」と回答されました。そこで、市の災害対策本部へも出かけましたが、ここも同じ答えが返ってきました。

決して売名行為でやったことではないことを、どうか分かってほしいのです。

一週間経過してからは、壊れている仏壇を引き取ってほしいという電話が、かなりの件数にのぼってきました。そこで、被災された人を訪問して仏壇を無料でお引き取りし、保管するサービスを始めたところ、傾いた寺に保管できないのでぜひ頼むと、依頼が殺到、五日間で二百基を超えました。修復して再び使えるのは六割程度です。被災を受けた人には、せめて仏壇だけは残したいという切実な願いがあるのです。

神戸には保管場所がないので、本社の姫路市と大阪の門真市の二カ所の配送センターに約四千平方メートルのスペースを確保し、依頼がありますと社員を派遣し、配送も無料で引き受けています。

この二カ所の配送センターが無事だったことは、不幸中の幸いでありました。被災地の西の姫路と、東の門真から、挟み撃ちのような格好で、六合のトラックをフル回転させました。まず十八日から二十四日まで、八店舗の倒壊した仏壇約七百基を配送センターまで運ぶ、引き取り作戦を速やかに実行しました。

その後、両配送センターから、新調の仏壇、仏具類を八店舗に送る、補充作戦に切り替え、二十二日から二十六日までの五日間でほぼ完了させました。

道路は、いたる所で不通になっていたため、四トン車で姫路を朝八時に出発しても神戸店に着くのは午後の六時、荷物を降ろして姫路に帰る時刻は午前四時か五時になり、そこで待機している社員が仏壇を積んで、再び神戸方面に向かうというピストン運送を繰り返しました。

この間、不眠不休で、浜屋の社員は働きました。しんどいとか疲れたと言った社員は誰一人いませんでした。そうしたことは、地震発生した日から続いていました。このことは社員の出勤率が如実に物語っています。

十七日の社員の出勤率は八〇%、十八日は九〇%、十九日は九五%、二十日にはほぼ一〇〇%になっていました。

十九日の五%の欠勤者の要因は、住まいが倒壊したからでありました。

被災八店舗の従業員百八十人(うち八十人は女子社員)は、家のことをさしおいて、自発的に出勤したのです。何しろ電話が通じないので、このことも後になって分かりました。みんな二時間から五時間、歩いたり自転車やバイクに乗って、出勤したのです。

浜屋の社員は全部で四百五十人ですが、被災しなかった社員二百七十人も、八店舗の復旧に邁進しました。

店先通る市民にお茶

不眠不休、商品入れ換え

心痛む...被災寺院の復興問題

社員は一人怪我をしただけで全員無事でした。人的被害が無かったことは、本当に良かった。何しろ、浜屋の財産は人なのですから。

悲しい事もありました。尼崎店の田中好人店長の母親が亡くなりました。このことを知った各地の社員一同が、被災地の店へ救援物資を送ってきました。食料はむろん、鍋、釜から下着まで、ありとあらゆる生活必需品が、二トン車に満載されていました。

多すぎるくらい集まったので、きょう、神戸市長田区の蓮池小学校と中央区の上筒小学校に、ほとんど大半を持って行きました。両校で避難生活している人々は、日用品が足りなかったため、本当に喜んでいただきました。

神戸は、大震災で交通、通信、電気、水道といった近代都市の生活基盤を支えるライフラインが瞬時に破壊されました。

先に言ったとおり、電気と水が神戸店に通じていたので、「ご通行の皆様へ温かいお茶を用意いたしました。ご自由に遠慮なくお召し上り下さい」という張り紙をして、店の前に給茶器を設置し、お茶の無料サービスをしています。

三十日にJRが西から神戸駅まで開通したので、元町やセンター街は、通行者が激増しています。寒い時期でもあるし、熱いお茶を求める人は、いつも長蛇の列です。それから、社内のトイレも通行の皆様には開放しています。こちらでも大変喜ばれています。普段なら何でもない事です、電気と水の有り難さも、身にしみて感じました。

戦後五十年目、バブル経済崩壊のさなかの年に大震災が起こったことは象徴的であります。

浜屋に限らず、大震災で、企業体の社員や市民ボランティアの活動は、感銘を与えています。これまで、内外から、日本は自分のことしか考えない国だと言われてきたが、この体験が、これからの日本に新しい方向を示唆するに違いありません。

被災地の人々は、これからも切実な困難に直面するでしょうが、戦後、焼け跡から日本の国が見事に復興したよ

うに、今度の大地震は、むしろ日本の経済が立ち直るいいきっかけになるのではないかと考えています。

最後に申したいことがもう一つあります。それは中外日報に報道されているとおり、今度の大地震で、被災地にある寺院が、ことごとく壊滅的なダメージを受けていることです。寺院の復旧は、そう簡単にはまいりません。そのことが心配でなりません。